



# 鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第101号

2019年9月1日

第15回社叢インストラクター養成セミナー

百舌鳥古市古墳群と伏見稲荷大社で

11月17日(日)と23日(土・祝)に

今年も下記の通り社叢インストラクター養成セミナーを関西で開催する。

まず11月17日(日)には、今年7月に世界文化遺産に登録された百舌鳥墳群を訪れ、社叢としての古墳群を見学・考察する。なお、午後からの現地見学は関西定例研究会との共催で、一般の会員も参加できる。

百舌鳥古墳群は、堺市内の約4km四方に広がる4世紀後半から6世紀前半に造られた44基の古墳で、世界最大級の墳墓・仁徳天皇陵古墳をはじめとする巨大前方後円墳などが含まれる。

午前中は、まず堺市博物館の展示を見学しながら社叢の概要について学芸員の説明を聞く。次いで渡辺弘之社叢学会副理事長(京都大学名誉教授)が社叢としての古墳について講義する。

午後からはヴォランティアガイドの案内で古墳を巡り、遠望とはなるが、古墳の植物・植生を観察する。

次いで23日(土・祝)は、伏見稲荷大社で、まず井上満郎社叢学会副理事長(京都産業大学名誉教授)の講義を聞いた後、糸谷正俊社叢学会副理事長(株総合計画機構相談役)から、都市開発により圧迫される社叢の扱いについて聞く。

午後からは社叢の構造と社叢調査の意味と方法について聞いた後、実際に社叢にでて社叢調査と調査結果の記述の仕方を学ぶ。

受講料は、正・協力・賛助会員は15,000円、市民会員は17,000円。申込者が3人に満たない場合は中止する。申込用紙は社叢学会ホームページ(<http://www.shasou.org/inst/ent.pdf>)に掲載しているので必要事項を記入の上、郵送されたい(mail不可)。申し込み締め切りは10月末日(木)必着。

なお、一般会員で17日午前の受講希望者は、受講料として2,000円を申し受ける。

日時	11月17日(日)	11月23日(土・祝)	
会場	堺市博物館～百舌鳥古墳群	会場	伏見稲荷大社儀式殿
スケジュール	テーマと講師	スケジュール	テーマと講師
10:00～10:10	オリエンテーション	10:00～11:00	講義:神社と社叢の成り立ち 井上満郎
10:10～11:10	古墳の概要説明と博物館展示 見学 堺市博物館学芸員	11:15～12:15	講義:都市部における社叢の管理 糸谷正俊
11:20～12:20	講義:社叢としてみる古墳 渡辺弘之	13:00～14:00	講義:社叢の構造と調査の意味、方法 渡辺弘之・名波哲
13:00～16:00	古墳見学 (関西定例研究会が合流)	14:15～16:00	実習:社叢調査 渡辺弘之・名波哲

東日本大震災社叢復興支援事業報告書を発行

8年間の全てを記録 現地調査員の生の声も 頒価 3,000円



## 賀茂別雷神社の由緒・神話と葵祭

話題提供： 田中 安比呂(賀茂別雷神社宮司)

**創建の神話** 古事記の記載によると、日向から大和に向かう神武天皇を熊野から大和まで案内したヤタガラスは賀茂建角身命の化身で、その功績を認められ、賀茂の地に鎮座することとなった。

ある雷の日、賀茂建角身命の娘である賀茂玉依比売命が賀茂川の上流で禊ぎをしていたところ、丹塗りの矢が流れてきたので、不思議に思い持ち帰り、丁重に祀ったところ懐妊し、御子が生まれた。国中から神を招いた元服の祝宴で、賀茂建角身命が御子に、招かれた中にいるであろう父親に杯を勧めるよう命じた所、御子は「我が父は天津神なり」と言い、杯を天に向かって投げ上げると同時に雷鳴と共に天に昇ってしまった。

御子との再会を願う玉依日売の夢枕に「馬を走らせ、賢木を採って神聖な場に布を下げ、葵・桂を束ねて飾って待てば来る」という神託があった。その通りにすると成人となった神が神山(こうやま)の磐座に降臨、賀茂別雷神として祀られることとなった。

**陰陽思想** 境内には陰陽思想が息づいている。細殿前の立砂は神が降臨した神山をかたどっており、右が陰(偶数)で二葉の、左が陽(奇数)で三葉の松葉が飾られていて、一對で一つの山を表している。最大の陽の数が重なる9月9日の重陽には立砂の前で烏相撲が奉納される。烏に扮した地域住民が二手に分かれ、烏をまねてびよんびよんと飛び、一方はかーかーかーと、他方がこーこーこーと烏の鳴きまねをする。境内の土俵では子供相撲大会が催される。

**葵祭** 6世紀、欽明天皇の代に始まった葵祭は今は5月15日に斎行されるが、先立つ12日の夜8時に神山との間の御阿礼所で神を迎える秘儀を斎行する。15日の社頭の儀では宮中からの勅使が朱塗りの祭文を奏上するが、朱色の紙を使うのは賀茂社だけのことで、祭りのめでたさを表している。奏上された祭文は宮司が磐座をかたどった石の上で祝詞をあげて神に伝える。近隣の住民も軒先に葵を飾って祭りを楽しんでいる様子が絵図などにも見える。源氏物語にもあるように、時には陣取りの争いも起こる程、葵祭は賑やかで大切な祭りであった。

平安時代から鎌倉時代にかけては皇族である斎王が巫女として奉仕していたが、今では葵祭の斎王代

としてその形を残している。葵祭で特筆されるのは平安時代からの形式を受け継ぐ神饌で、神殿内に供える「内陣神饌」「外陣神饌」に加えて、神殿の前庭に全国から集まる神のために葵祭独特の「庭積神饌」が、山海の産物を小皿120枚に盛りつけて供される。

全ての神事が終わり夕闇が迫る頃、御殿に向かって、さらに御殿裏から神山に向かって馬を走らせる走馬が斎行される。5月5日の競馬(くらべうま)は今の競馬の発祥とされている。そのため、通常であれば社叢である所が馬場を確保するための空間になっている。

**徳川幕府とのつながり** 両賀茂社の神紋は双葉葵だが、葵は「あふひ」で、「ひ」は火や陽など神聖なものを表し、「神に会う」意がある。1本の根から必ず2本の茎が出ることから神との縁を結ぶ意もある。徳川家は出身地である三河の分霊社に深い信仰を寄せており、神社からも、関ヶ原合戦以降、駿府に、後には江戸に葵を届けていた。こうしたことから神紋をアレンジして三つ葉葵の家紋を作ったのだと思われる。

徳川家とのつながりは強く、御水尾天皇に嫁いだ三代將軍家光の妹である和子(まさこ)は、神社が荒れているのを見てこれを憂い、幕府からの抛出で60棟の社殿全ての建て替えを命じた。今の社殿は当時のもので、400年前のものを後世に伝えるべく修復を重ねながら維持している。

**本殿と権殿** 建物で特徴的なのは本殿の横に全く同じ構造の権殿を持つことだ。これは本殿に何か事があればすぐに神を移すための建物で、権殿があるのは上賀茂神社だけだ。ここでも21年目に遷宮を行っているが、現在の本殿・権殿は国宝に指定されているために、建て替えることができない。そのため檜皮の葺き替えなどの修復で遷宮にかえている。この檜皮についても、100年後を見据え、ヒノキの植樹を実施している。

本殿・権殿の扉の脇の壁には狩野派による狛犬の絵が描かれているが、これは狛犬が夜な夜な抜け出すので本殿に閉じ込め、その影をかたどって描いたとされている。葵祭ではこの影の狛犬にも供え物をあげる。

他にない独特の神事も多いのだが、意味を問うても、昔からやっているからという答えが返ってくる。これこそが神事で、神が祀れといったから祀るということが自然に定着しているのだろう。

※ 当日は松谷茂・京都府立植物園名誉園長による境内の植物についての講演があったが、紙面の都合上、次号に掲載する

### 次回予告【第86回関西定例研究会】

- ◆日 時：9月28日(土) 13:30~16:30
- ◆場 所：伏見稲荷大社儀式殿(伏見区藪ノ内町68)
- ◆テマ：ちまき、チマキザサから粽づくりまで
- ◆講師：深町 加津枝(京都大学大学院准教授)



## 鬼と仏—日本人の信仰の姿

講師：J.A.キブツ(元フランス国立科学研究センター教授)  
川崎 瑞穂(神戸大学 日本学術振興会特別研究員PD)

### 「幻の鬼」J.A. キブツ

鬼を題材にしている日本文化を見てみると、折口信夫の『春来る鬼』や和歌森太郎の『山と鬼』、馬場あき子の『鬼の研究』などがあるが、鬼という文字の語源が一般的には中国にあると言われることを除外すれば、他の文化圏においてもこの類の鬼が存在することを誰も考えていなかった事に驚かされる。ユーラシアから来た私には、欧州の人の空想上に現れるデーモンと、日本の民話に残る鬼とは非常に類似点があるように思われる。

空想上の中で鬼はどのような姿をし、どのような役割を演じてきたのか。それぞれの地域の信仰、キリスト教や仏教など宗教から派生したものでありながら、デーモンと鬼は相互の影響を探求したくなるほど類似している。

文学や絵画を通じてどのように表現されているかをみていくと、『今昔物語』に表される鬼は、現代にそのまま受け継がれているように思う。一方、欧州のデーモンのイメージは常に変異しており、時代や地域で差異がある。この点は鬼とデーモンの大きな違いの1つであるが、人と同じような形態で、恐ろしい形相をしている点は類似している。特に驚くべき共通点は体の色と角がある事である。欧州では魔王や聖ニコラス、仏教におけるマラー王や閻魔などの権力者を助ける存在であることも類似している。罪人たちに恐怖を与え、罪を後悔させる役割を担っており、また子供達を正しい方向へと導く。

夢の中に現れる悪魔と年中行事に現れる鬼などをお札(護符)で見ると、その姿はよく似ている。

「鬼の音 クロード・レヴィ=ストロースへのオマージュ」川端 瑞穂

鬼来迎を題材に鬼の芸能の構造についての一考察として私見を申し述べる。民俗学者三隅治雄著『芸能史の民俗的研究』によれば、現行の鬼来迎がかつて多数存在した類似する芸能の多様な表現の1つであり、地獄の苦しみを表現し、その苦しみを仏、菩薩が救済して亡者を浄土へ導くという演出をするという共通の内容を持っている。

鬼来迎の音楽としては、シンバルと歌、という

てもシンプルなものである。他の民俗芸能が様々な楽器が使われることに比べると少なく感じるが、もともとの形で行われていたのかというのは断定不可能である。鬼来迎の音はこればかりではない。騒音、無音、鬼の叫び声なども音の一部であるといえるだろう。鬼は歌以外の4種全ての音を用いており、料理に関するモチーフによく登場する。

民俗芸能では鬼が火をもたらしたり、火を消すものが多くみられる。鬼来迎においても鬼婆が膳を出し、そこから火が出るというシーンがあるが、挿話的で控えめな表現であり、他の鬼がもたらす火のモチーフとしては弱い形で出現しているとも考えることもできる。

節分では炒った豆を鬼に投げつける。調理するには火加減が大事であり、強過ぎても弱過ぎても豆を炒ることはできない。炒り豆には火と程よい関係であることが示されている。またここで重要なことは水で戻した豆ではなく、生の豆を炒るということである。

鬼来迎には水の関わる演目「死者の釜茹で」がある。死者は無音で演じられる。水は火と反対側の項に入るもので、鬼たちは人を釜茹でにしてその塩梅をみているのだが、もちろん人はそれを食べることはできない。

ナマハゲは鬼ではないが、火に当たり過ぎた際にできる皮膚の炎症を剥がしに来るところからナマハゲとも言われる。これもまた火加減ということが関連してくる。愛知県の鬼祭りでは、鬼に向かって豆と一緒にアメが投げられる。マメとアメという音による置き換えが行われているのだが、アメは唾液(水)によって溶かされ食べることができるものとして、水との関わりも感じられる。またアメは人からではなく、鬼から人に投げられる。

レヴィ=ストロースは論文「料理の三角形」において、自然の食材を火と水で料理をする過程を理論的に分析している。この三角形に鬼を当てはめて考えてみると、鬼来迎には火と水による料理の起源を語っているように感じられるのである。程よく調理をすること、それは料理を通じて行きすぎる文化をたしなめるかのようでもあり、またこの三角形に当てはめることで、鬼来迎の音の起源も見えてくるように思われる。

(文責 渡邊節子)

## 次回予告【第80回関東定例研究会】

- ◆日 時：10月26日(土) 13:30~17:30
- ◆場 所：國學院大学・渋谷キャンパス常盤松ホール(変更の可能性あり)
- ◆テ マ：震災を経ても土地に生きる—南三陸町波伝谷、12年間の映像記録を通じて
- ◆講 師：吾妻 和樹(映画監督)
- ◆上映作品：「波伝谷に生きる人びと」(135分 2011年制作)

※ 共催：ポーラ伝統文化振興財団・國學院大學環境教育研究プロジェクト

## 事務局から

- 下記の通り、『社叢学研究』18号への投稿を募集しています。研究者の業績評価にもつながりますので、ぜひご投稿ください。論文には至らない準備段階の研究ノートや、短報、身近な活動、社叢の訪問記(紀行文)もお待ちしています。学術論文としての体裁を整えるための書き方や、引用文献、参考文献の扱い、記載の仕方については社叢学会のホームページに公開しています(<http://www.shasou.org/journal/format.pdf>)。お目通し下さい。
- 会費をお支払いいただいた方には順次、会員証をお送りいたしております。お支払いいただいたにもかかわらず会員証が届かない場合は、お手数ですが事務局にご一報ください。
- 久しぶりに中部定例研究会を開催いたします。ヤマトタケルが死の間際まで愛用していた笠と杖を御神体とする加佐登神社の参拝・拝観の他、

植生についての講義や、本居宣長や平田篤胤などの国学者がヤマトタケルの御陵であると主張していた白鳥塚古墳の見学など盛り沢山な内容です。奮ってご参加ください。

## 編集後記

もうね、この足の踏み場のなさは始まって以来なんじゃね? 今を去る14年前(もう!?)、愛・地球博用にリーフレットを莫大に作って、莫大に余った後で、少しは防寒になるかと外壁直結の物入れに詰め込んだのだけれど、それはそれでちゃんと収まっているし、そもそもあれは薄くて小さいから何とでもなる。

が、今回は300頁超、重さ1kg近いブツですよ。これが600冊近く事務局に積みあがっているのだから。800部作れとゆーから行き先の目途は立っているのだと思いきや! 相変わらずの根拠のない楽天主義ですか。何とかしてくださいよ。(藤岡 郁)

## 次回予告【第34回中部定例研究会】

- ◆日 時：10月26日(土) 10:45~16:00
- ◆場 所：加佐登神社(三重県鈴鹿市加佐登町)・白鳥塚古墳
- ◆テ - マ：加佐登神社の社叢と白鳥塚古墳
- ◆スケジュール：
  - 10:45 加佐登神社入り口集合→遊歩道見学(案内：前出健太郎)
  - 11:45 正式参拝・神社案内
  - 12:15~13:00 昼食・境内散策
  - 13:00~15:00 講義と意見交換「加佐登神社の歴史と自然を学ぶ」
    - 講義①「加佐登神社の植生について」長谷川泰洋(名古屋産業大学)
    - 講義②「白鳥塚古墳と古代の鈴鹿」鈴鹿市文化スポーツ部文化財課
  - 15:00~16:00 白鳥塚古墳・みささぎの郷/里山見学(解散)

## 掲 示 板

## 『原稿募集!』

『社叢学研究』第18号への投稿：論文、研究ノート、短報、資料紹介や調査報告(各400字詰原稿用紙40枚以内)と「鎮守の森の活動報告(祭、音楽会、調査、ワークショップなどの実施報告、抱える問題点など)」「社叢訪問記」(各1,200字程度)を募集いたします。締め切りは、論文等10月31日(木) 活動報告等12月25日(月) いずれも必着。

★ 会誌の投稿規程と論文の体裁、引用文献の記載方法を公開しています。投稿される方は、これに従って提出してください。<http://www.shasou.org/journal/format.pdf>

\* 書評欄では会員の皆さまの著作を取り上げています。出版された方は、ぜひご献本下さい。

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号  
TEL・FAX 075-212-2973

URL <http://www.shasou.org> E-Mail [shasou@ams.odn.ne.jp](mailto:shasou@ams.odn.ne.jp)

社叢学会関東支部 〒368-0041 秩父市番場町1-1 秩父神社社務所内  
TEL080-1514-5032 E-Mail [shasougakkai@hotmail.com](mailto:shasougakkai@hotmail.com)